



ピクタインダカン

(おさみがりにぼし)

第 19 号

発行日 2019年1月5日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

母

朝一番 呼吸をととのえ

母の遺影のまえで

娘や孫のしあわせを祈る

母はいつも黙っている

たたきつける石の雨に

心が冷たくぬかるむとき

わたしは

そばにいる母に語りかける

温かなまなざしの奥の

きびしく生きた母の

記憶

わたしの内にもある

母の固い精神 強靱な意志で

かがんだ魂を立たせる

コスモス

秋の底の

薄紅色のコスモスに甦る

腰をまげた

半手拭姿の母

路傍のコスモスのあいだに

畑で茄子をもうでいる

老いた母

ふんばった足に

衰えた時間がやさしく光る

住む人がいなくなつて

寂れた生家は

とり壊されるという

久しぶりの生家は

雑草が屋敷をすつぽり取り囲み

盆栽も赤茶け 心が抜けていた

カボチャは庭を跋扈し

蜘蛛の網は緑の陰翳と化していた

虚ろに

去来する数多の追憶

母も わたしたち姉妹も

帰る記憶は

もう ない

高くゆれる

コスモスの風*_＊につて

母のやわらかい声が

聞こえてきた

帰宅したわたしは

百歳になつた母の遺影に

故郷のコスモスを供えた

*「コスモスの丈より低く老いにけり」(母の句)

龍神

瀧は数千億のしずくを点綴し
細い絹の帯となつている

絵からきこえる
重量感ある瀧の
落下する豪快な音
地を這う響き

瀧の糸は岩床を
念仏のように
清んだ美しさで――

臉を閉じると

紫の瀧が走る、白の瀧が走る、黄の瀧が走る
薄紫の瀧が走る、緑の瀧が走る、赤の瀧が走
る、青の瀧が走る、橙の瀧が走る

「龍神^{*}」と名づけられた
巨大な瀧は

龍の記憶をわたしに蘇らせた

龍は

わたしのなかに

ずっと棲みつづけていた

荒れ狂う海

鋭い波の牙が襲いかかり

鱗を逆立て激怒する

赤と緑の二頭の龍

海が割れる光景を

火の見やぐらの天辺にしがみつ

いている わたし

半世紀も見つづけてきた夢

熾烈な闘いは

いのちの反転を予感していたのか

その後

いまわしい惨劇に遭遇

以来わたしの夢のなかに

龍はあらわれてこない

瀧の面が銀色にきらめき

龍の幽かなすがたが浮かびあがってきた

青白くともる一点に

階がかかり

光を纏ったわたしは

瀧の道を昇っていった

*千住博展（秋田県立美術館）を鑑賞して

光の龍

瀧は数千億のしずくを点綴し

細い絹の帯となつて

清んだ美しさで岩床を流れている

絵から聞こえる

みなぎる瀧の水勢 胸にひびく

瞼を閉じると

眼のなかを走る八彩の龍

「龍神^{*}」と名づけられた瀧は

龍の記憶をわたしに蘇らせた

龍はわたしのなかに ずっと棲み続けていた

荒れ狂う海 鋭い波の牙が襲いかかり 鱗を逆

立て激怒する 赤と緑の二頭の龍 海が割れる

光景を 火の見櫓の天辺にしがみつき 見えてい

るわたし

半世紀も見続けてきた夢 熾烈な闘いは 命の
反転を予感していたのか その後 忌まわしい
惨劇に遭遇 以来わたしの夢のなから 龍は
消えた

魂の牢獄

21番！

看守に

忌まわしい番号で

呼ばれて16年

男は

なめるような目つきで

日に何度も巡視する

青白くともる一点に階がかかり
龍になったわたしは
光を纏って瀧の道を昇っていった

独房に収監されている

わたしには

労働も

会話も

許されていない

ただ

紙と鉛筆は

与えられている

*千住博展（秋田県立美術館）を鑑賞して

堅固な牢の中で

わたしは詩を書く

塀の外の

空をほどく鳥を

あかりを点す星を

見えない時の騒めきを

わたしは

病の牢獄に繋がれて

はじめて

詩と出会った

詩を書いていると

たったいま不幸にあったように

かなしみがこみ上げてくる

塞き止められていた苦痛があふれてくる

だが わたしは

不条理を洗う詩の

魂を鍛えつづけていく

濁黒

あの日

わたしは

不条理に巻き込まれた

わたしを呑み込んだ闇は

瞬時に

時を凍らせた

見ようとしても見えない

聞こうとしても聞こえない

財力、地位、権力が

わたしを踵で踏みつける

汚さ、醜さ、卑怯に

身動きできない……

魂は

みずからの重さで崩壊し
疲弊したわたしは

指先から
溶けていく

生きる希望も断ち切られ
食べる本能も失った

真つ黒に

刷り込まれた時間に

人生が反転する

融解する真実のあいだで
わたしは昏睡に捕らえられた

這いながらも わたしは

刻印された黒い記憶を

今日から濁黒ククロと名づけた

おまえは阿修羅となり

すべての 失われたものの姿をさらせ

占領された場所を取り戻せ
傷ついた魂に生を呼び込め
屈辱の石を蹴飛ばせ
永遠におまえの声を
上げよ

声

掻いて掻いて掻いて掻いて掻いて掻いて

きょうも

全身に赤い薔薇が咲く

きょうも

二〇本の手足の先端に激痛がはしる

たましいに止めを刺す

電気ショックのような拷問

(助けて……)

わたしを陥れる汚れた声が近づいてくる

執拗につきまとう声に浸食されて

こころの陸地が崩れていく

声は朝に 昼に

そしてまた夜に射ってくる

わたしは声の中毒になる

毒声は

たましいを引き裂きつづける

スプーンも持てなくなった痺れる手は

毎食手をつけないままのお膳を

配膳台に戻していた

病院の廊下で

点滴袋をぶら下げた男性に呼びとめられた

(あんただったのか)

わたしは食べたくても食べれないんだ

白い清潔な声は

食事を摂らなかつた食器の主を

心配していた

そんなある日

ひとりの医師と出会った

(あなたにはなれないが)

分かるうとすることはできる

やっど

黒い記憶の声を入れかえる場所を

わたしは手にいれた

肉声

わたしはそれを濁黒^{ククロ}と名づけた

魂をのみこんだ闇は

針の孔の光も通さず

瞬時に

時を凍らせた

見ようとしても見えない

聞こうとしても聞こえない

刻まれる真つ黒な時間

融解する真実のあいだで

生きる指針が狂ってしまった

みずからの重さで崩壊し

疲弊したからだか

指先から溶けていく

わたしはカオスになる

最初に失うのは

食べる本能

最初に断ち切られるのは

安易な希望

冷たいベッドの暗翳が漂うなかで

刻印された黒い記憶よ

おまえを明らさまに漂白し

傷ついた屈辱の石を蹴飛ばし

すべての 失われた場所を取り戻すために

わたしは

永遠に肉声を……

新生

やつとここまで来た
右に黒茶けた岩山
左に昏く沈んだ谷

立ちはだかる
忌まわしい記憶の壁を破り
みずからの手で
道を切り開かねばならない

見渡せば
まだ覚めない雪溪の冷たいねむり
北の斜面の白い静寂

霧が重くたれこめてきた
涼しい風の呼吸が聞こえてくる
やがて霧が晴れ
薄桃いろの微笑みを浮かべた

ひと群れの花

崖道に足を踏みいれる
やにわに路肩の一部が崩れ
深い谷間にころげ落ちる石塊
恐怖のあまり顔が引きつる

見下ろすと
谷川がひとつに繋がって流れてゆく
わたしにも
失ったものを繋ぎ合わせる
水が流れているのだろうか

急坂を登りつめると
澄みきった無窮の空
やわらかな稜線の向こうに
光が生まれていた

①

脳味噌に皺が多いひとは
顔に皺が少ない
わたしは顔に皺が多い
どうりでこの頃……

②

鳴くな！
こんなときに——
映画館での腹の虫

③

朝ドラのまんぷくちゃんは
塩をつくる
夕ドラのまんぷくぷくちゃんは
詩をつくる

④

♪おならのバリエーション
ぴったりあうのはどれ？

じゃがいも	パツパワ	ペーチョン
さつまいも	ボボボボ	プースーピン
さといも	スカスヘ	ドツカカーン
ながいも	フワトン	ムズズーン
たるいも	ズバツヌ	メツポンキン
つくねいも	ペプピピ	イランボン

⑤

高齢者の4つのムエンは

無縁

無援

無円

無艶

わたしには

全部

(^_^)v

⑥

わたしの苦手なものは
ゴキブリよ

あなたの苦手なものは？

Aさん

あなたよ！

⑦

余裕があるときは入らないのに
余裕がないときに

いっぱい入るものなんだ？

お金を呼びこむ財布と
わたしのでっかい胃袋！

【あとがき】

イルミネーションが輝く凜烈な夜、バス停で見知らぬ女性と話した。オフホワイトのオーバーに真っ赤なマフラー、ベレー帽にイヤリングの素敵なお出立ち。「わたし七十五歳、独り身。前向きに生きてるの。幸せよ！」。きりりと引きしめる寒さのなか、女性は向日性の澄んだ光りを纏っていた。

*

♪ おまえが消えて喜ぶ者に

おまえのオールをまかせるな ♪

ラジオから、中島みゆきの歌が流れてきた。

今年もはじまった。頑張るぞ!!

「ピッタインダウン」共々、
今年もどうぞよろしくお願ひ

申し上げます。

